昭和三十一年に於ける国語学界の展望

方言研究界

藤原与一

はじめ

「方言学界」とは、今は、言わない。方言学の名は、あずかりとする。

こうして、かりに、方言研究界というものを考える。その方言研究界の内外を、ひとわたりながめてみよう。

今は、「昭和三十一年における」方言研究界を「展望」するのが、わたしの任務である。

いわゆる展望のしごとは、どのようなことをするのがもっとも本質的なのであろうか。「展望」の深みを考え、展望がやがてこの方面の学問の進歩発展に寄与するものとなるべきことを考える時、展望は容易なしごとではないと痛感される。

この点で、わたしは、はじめに、三つ四つのことを、おことわりしておきたい。

一つに、「展望」を、かりに年間時評と考えた場合、昭和三十一年という時限に、わたしは、かくべつの特性を見いだすことはできない。過去一ヵ年間のうごきを観察してみるのに、それは、前後に自然につづいた、抑揚にとぼしい一年間であったように思う。したがって、以下、三十一年という年をまとめて論じるとしても、これはまったく、便宜にしたがうものであることをおことわりする。

二つに、「展望」と言っても、これからのわたしの作業は、文献・記録をたよりとするのにとどまる。記録になっていない活動状況については、知るところがごく少いのである。じっさいには、文書で報告されてはいない研究活動が、諸方に多くあるだろう。研究団体の活動はもちろんのこと、個人の特志家の着実な研究も、多いはずである。また、方言を直接に研究する人ではなくても、地方の方言研究を推進している人たちも、あることと思われる。そのような言語学的良識は、ずいぶん貴重なものであることを、わたしも経験している。研究界展望を、渾然とした深いものにするためには、成果の外形をこえて、右のような未記録の底面にもくまなく観察の目をそそぎ、文書以前の胎動や見識をとらえてこなくてはならない。そうしてはじめて、研究界のうごきが、研究界のあゆみとして、解釈されると思う。しかし、このような総合的な把握は、今のわたしにはできない。——それにしても、「展望」の心意としては、片手おちにならぬよう、記録以外の事情にも、じゅうぶんに思いをはせるような心意でいたいと思う。外形に即応した一般論が、学問進歩のかくれた芽ばえを、し

かも健実な芽ばえを、無下にきずつけたりすることのないようにと、自己をいましめる。

三つに、その外形にあらわれた研究物についても、わたしは、去年のすべてを見得てはいない。見あつめる便宜にも欠けている。重要な研究物を見おとしているかもしれないというれいが多分にある。このことは、特におことわりを申しておきたい。

四つに、見得ているものについても、その一々を正確に理解することは、わたしにとって、容易なことではない。内在批評のむずかしさである。個々のものについての批評は、用心のうえにも用心したい。一つのものについての単純な批評が、読者の、他との比較や品評観念をさそうこともあるとするならば、ことにあたり、ものについての評言は、じゅうぶんに注意しなければならないと思う。

著書の類

昭和三十一年の方言研究界は、どのような書物を世におくったであろうか。

まず、地域順に整理し得るものを、左に列挙しよう。（謄写物の類を含む）

1 温海土産（江戸期荘内方言資料）（複製）斎藤義七郎 私刷
2 細倉の言葉 世古正昭 三菱金属鉱業株式会社細倉鉱業所文化会
3 信州方言風物誌 第一 福沢武一 柳沢書店 長野県北安曇郡池田町
4 能登木郎方言考 (一)～(四) 馬場 宏 私刷
5 富山市児童言語調査 第六集（名詞篇） 富山市教育委員会
6 「富山県方言集成資料目録稿」（32年5月）の前稿 富山市教育委員会
7 礪波民俗方言集稿 (8) 佐伯安一 私刷
8 白川北部（やまが）の方言 佐名木 熙 白川小学校
椿原分校
9 なごやことば（文化財叢書第六号） 芥子川律治 名古屋市経済局貿易観光課
10 方言論文集 (1)（近畿方言双書第四冊） 楳垣 実編 帝塚山学院短大内近畿方言学会
11 播州赤穂方言の研究 語法編 兵庫県方言学会 神戸大学文学部国文学研究室内兵庫県方言学会
12 但馬国温泉町方言記 岡田荘之輔 私刷
13 山陰方言雑考 生田彌範 立林書店 米子市
14 大分県方言の旅 第2巻 松田正義 桑井寛一 NHK大分放送局
15 奄美方言の研究 第一編 寺師忠夫 鹿児島県教育研究所 〈未見〉
16 与論語と上代語との語形及び語義の比較研究 与論語の研究第一編 山田 実 私刷

以上を去年の研究業績として見る時、どのような評価がなされるであろうか。方言の研究は、しょせん、地域に即応すべきものとすれば、国内諸地域の諸方言について、さかんに研究のおこされるのがよいことは、言うまでもない。そう思って見れば、右の状況の段階は、まだまだものたりないとしなくてはなるまい。日

本語の現実のすがたを方言に見るという立てまえからすれば、なおなお、研究のまなこを向けるべき重要地域が多いはずである。

ここでひとつ、筆者はかならずしも、「今のうちに方言を研究しなければ」とばかり言うものではない。したがって、「急いでやらねば、重要地の方言も、亡んでしまう。」とばかり言うものではない。なるほど、ことばは二十年三十年と時のたつうちに、ずいぶん変る。なにより、わたしども自身の幼少年時代の郷土のことばと、今日の郷土のことばとをくらべてみれば、そのことはよくわかる。それにしても、一方ではまた、方言は変りにくいものだとも思う。昭和二十年ごろを境として、その前後を比較してみた時、たとえば東北地方の方言の中にはいってみて、あれほど社会生活全般の激変があったように言われたのだけれども、ことばは存外、かわっていないものだとも思う。探究の方途さえよければ、年長者からは、まだまだ、そうとうに、古めかしいことばも、戦前なみに、聞きとり得ることが少くないようである。急がなくても、よいしごと、だいじなしごとは、いくらでもできるだろうと言いたい。かつ、考えなくてはならぬのは、古めかしいものをほり出すばかりが方言研究ではないということである。古めかしいものがどんなにして亡んでいくか、どんなものがどう生まれているか、生まれようとしているか、というようなことも、たいせつな観察事項である。方言を一体の生活として見、そのまとまりのうごき全体を問題にすることが、研究として基本的である。過去から未来につながって、目下さまざまのゆれを示している、流動の方言生活、これをまっ正面から対象とするのが、有意義な方言研究であろう。このような方言研究は、言語の統一と分化という二律背反に即応して、無始無終に成り立っていくものである。意義をこう考えて、しかも現下の状況から、重要地域の判断を厳格にして、学徒は進んで有益な研究成果をあげなくてはならないと思う。

右に列挙した業績中には、一類として、方言への愛情を結晶させたものがある。また一類として、国語教育的関心にもとずくものがある。愛情の書という思向は、一つの伝統でもあろう。ここには、方言研究と方言好事との、きわどいかかわりあいがある。国語教育家は「教育的に」方言を問題とし、明日の教室に役だつ方言研究を求めているが、その「方言調査」は、しばしば断片的で、方言生活を根からあたたかく抱きおこすとらえかたにとぼしい。民間の愛情家の場合は、思いをよせることは濃厚であっても、処理が時に非科学的である。〈もっとも、科学的と称する記述自体が、事実の誤認・誤解をふくんでいることは少くない。郷土人が郷土語を説明しても、その比較なり結びつけなりが、無理であったり恣意的であったりすることがある。〉

研究者にとってまず必要なのは、方言への愛情であろう。方言を方言の生活として見ること、その生活の特殊性を凝視することは、方言研究の第一歩である。やがて、そういう愛情を、みずから客体視し、これに合理的な分析を加えること、および、もっとも自然な統合的把握をこころみることがだいじである。

さきに列挙した業績中、11は共同調査の成果である。14もまた共同の作業であり、こころみの新しさと厳密とを求めている。10は研究の広場を設定しようとする楳垣氏の努力の産物である。このような方向も、いよいよ助長されるであろう。

全作品のおのおのが、いずれも、なみなみでない努力をかたむけたものであることは、どれを手にしてもよくわかる。地方々々の、私利をはなれた、犠牲の多い、研究と印行とが、しだいに、学界共通の広場を形成するようになって――そのように、この研究界が洗練され、向上して――、一部のプリントも、みんなが、ごくふつうに論議しあえるようになることが望ましい。

つぎに、全国地域にわたるものを見る。

17　NHK国語講座　方言の旅　日本放送協会編　宝文館

これは、だいたい府県別に放送されたものの、再録・編集である。

18　日本方言地図　東条操先生古稀記念会編　吉川弘文館

東条先生の古稀祝賀記念に、この一巻が刊行されたことは有意義だった。二十五葉の地図と、その解説とから成る。第一部は、明治の国語調査委員会の作った「音韻分布図」（そのうちの四枚）・「口語法分布図」（そのうちの十二枚）の複製である。東条先生のおしごとを記念するものとして、第一部がこのように編まれたことは、もっとも適切であったと言えよう。国語調査委員会の分布図は、先生の、一つの出発点でもあったと考えられるからである。第二部としては、第一に先生新作の「日本方言区画図」があり、これにつづいて、先生のおしごとの展開としての、四者による四枚の新作図がある。これのあと、「外国の方言地図」があって、「フランス言語図巻」（第七三六図）・「ドイツ言語図巻」（第七三図）・「ニューイングランド言語図巻」（第三七四図）・「朝鮮方言概観」（第六図）の四枚がそえられている。外国の図が加えられたことは、時宜を得たものであった。それらを見ると、地図には、それぞれに、語形がそのままに書きこまれていたり、符号が地点に加えられていたりしている。国語調査委員会の図は、分布を示すのに、地域を広くぬりつぶしている。諸地方から出る方言研究の刊行物には、その巻末に、苦心の分布図のつけ加えられていることが少くない。今後もこういうくわだては多くなるであろう。そのさい、右の外国の例を見わたすことは、緊要と思われる。

世に製図が多いのにつけては、考えない製図、むぞうさな製図になってはいけないことを言わなければならない。資料さえあつまれば、分布図はすぐにも書けると思うことは危険である。従来、言語地理学の説明として、「言語地理学は、言語製図学と言語地質学とから成る。」というようなことが言われている。わたしは、言語製図学というようなことばにはじめて接した時は、なにか、ことごとしいように感じた。が、しだいにじっさいの経験をするようになると、製図の業の、いかに深遠なものであるかが、よくわかったのである。製図のための用意は、どこまで周到――三次元的に四次元的に――であってもありすぎはしない。製図そのことが、言語地理学の大きな実践である。言語地理学の深さは製図の深さにあるとも言えよう。製図のための符号だけに限ってみても、符号学ということすら言えるのではないかと思う。符号の形状・大小、そういうことの相互対応関係、などなどについて、心理学的な研究を精確にしなくてはならぬことを思うと、日本の符号学はずいぶんおくれていると言わなくてはならない。西洋の言語地理学的手法・技術は、たしかに進んでいる。グロー

ター ス氏の恩恵によって見得た諸文献によれば、西欧の製図は、民俗学方面でも、じつにりっぱであり、その用意のこまかさと出来のおもしろさとは、わたしどもの目を見はらしめるものがある。わが国の、これからの方言地図も、「日本方言地図」をふみ台として、今後いちだんと発展しなくてはならないと思う。

19 日本方言区画地図（掛図） 東条操先生校閲 東京地図教材株式会社

これは、先生の日本方言区画図を中心として、他に、「全国アクセント分布」「全国音韻分布」「語法における東西両方言の境界地帯」などをあわせのせたものである。

20 日本語方言の方言地理学的研究 （英文） 藤原与一 Folklore Studies Vol. XV 東京 タトル商会

も去年の出版であった。なおこれは、「方言」についての地理学、方言を方言としてとりあつかっての地理学ということを目的として、方言地理学と称している。

方言研究の関係文献としては、つぎのものがある。

21 綜合日本民俗語彙 第四巻（ホ～ン）民俗学研究所編 平凡社

22 綜合日本民俗語彙 第五巻（総索引） 同右

23 隠語辞典 楳垣 実編 東京堂

国語教育にもわたるものには、

24 国語シリーズ 28 「標準語と方言」 文部省 国語課編集

25 同 31 「同右」第2集 同右

があった。

雑誌論文の類

〔その一 総記〕

1 言語境界線の諸問題 前田護郎 言語研究 第二十九号

2 文法体系について ――方言文法のために―― 宮島達夫 国語学 第二十五輯

3 俚語に関する多元的発生の仮説 長尾 勇 国語学 第二十七輯

4 方言研究における「未開拓の分野」 藤原与一 国語学 第二十四輯

は一般論的なもの。こゝに、

5 昭和三十年に於ける国語学界の展望 方言学 都竹通年雄 国語学 第二十六輯

6 東条操先生の「標準語引 分類方言辞典」を手にして 広戸惇 国語学 第二十四輯

をあわせかかげる。ついで、

7 共通語と方言 岩本 実 国語シリーズ 31 「標準語と方言」第2集

8 生活言語としての方言 武智雅一 国語シリーズ 28 「標準語と方言」

9 東京語から標準語へ 伊藤慎吾 国語シリーズ 28 「標準語と方言」

10 方言と標準語 藤原与一 ことばの講座（東京創元

社）第二巻の中
という一類のものがある。

11　新中国の標準語問題　那須　清　文学論輯　第四号
は関係項目である。
つぎに、分布・区画云々という類のものに、

12　語法上よりみたる中部日本方言の区画　牛山初男　信濃　第八巻第七号　〈未見〉

13　長野県方言における中信地方の分布的位置　福沢武一　信濃　第八巻第一号　〈未見〉

14　愛媛県方言の分布に関する研究状況　杉山正世　愛媛国文研究　第五号

15　幡多方言の系統　浜田数義　高知県立中村高等学校研究論集　第二号

などがある。このほかにも作物があるらしい。
つぎには、方言研究として、音韻・アクセント・語法・語彙などの、諸部門にわたって記述してあるものを、総記の一種として左にかかげよう。

16　秋山郷の言語構造について　―第一次報告―　研究紀要　第二輯　新潟大学教育学部長岡分校

17　神奈川県下の方言について　日野資純　神奈川県の民俗　〈未見〉

18　奈良県磯城郡多武峯村の方言　西宮一民　帝塚山学院短期大学研究年報　第3号

19　淡路方言雑感　福宜田竜昇　兵庫方言　4

20　伊島言語調査レポート　金沢　治　阿波方言　第三巻第一号

21　壱岐原方言管見　岡崎有郷　幡多方言　創刊号

22　奄美大島方言　山下文武　鹿児島民俗　第三巻第二・四号

諸部門にわたる時、その統合的な観点がなおよわい。一つの部門の記述としても、記述の体系を求める意識が強化されなくてはなるまい。方言（――体系的存在としての）記述の全一的な体系のよさ・美しさは、目下緊要の課題である。一般的に言って、この課題への心がまえが前進してきたことは、方言研究界の大きな進歩と言えよう。
つぎに資料的なものをあげる。

23　礪波の挨拶について　佐伯安一　加能民俗　第三巻第九号　〈未見〉

24　武家ことば、親・子・孫三代の移りゆき　文例文案並に解説　堀田要治　三重県方言　第2号

25　出雲方言抄　岡　義重　民間伝承　十二月号

26　鼻を切った女の話（琉球方言）　島袋盛敏氏の口話　言語生活　2月号

24はおもしろいこころみである。24 26のような、録音の資料が、かず多く出ることが望ましい。
つぎには、方言に関する随想の類をかかげよう。随想と言っても、諸種のものがある。

27　ふるさとのことば　服部四郎　三重県方言　第3号

28　私の方言生活　佐伯隆治　兵庫方言　3

29　沼島の半日　藤原与一　民間伝承　六月号

30 阿波方言への愛着　森本安市　阿波方言　第三巻第一号

31 方言随想　柿内実　幡多方言　創刊号

32 南予方言採訪記　浜田数義　幡多方言　創刊号

33 古島に残る古典的日本語　――対馬の旅から――

34 ぞうやく　――対馬の方言について――

右二つ　泉井久之助「言語の研究」（有信堂）の中

随想に、知的なものと情的なものとがある、とすることができよう。一方からすれば、回顧的随想・展望的随想の別も考えられる。今、わたしなどの欲しいのは、知的な、分析のよい、展望的な随想である。研究の新しいきっかけを、このような随想の中につかむことができよう。方言は、言ってみれば、特殊な言語生活である。この特殊の特殊性を、把握闡明するところがなくてはならない。しかし、その方途は容易に立たない。この時、知的な随想は、研究者にとって、しばしば有力なしげき・出発点となる。

随想の類として、雑誌「言語生活」によく出る「ことば風土記」をあげることができようか。「言語生活」1月号には、「寒い国の生活とことば」の編集がある。「言語生活」10月号は、「特集――現代文学と方言」となっている。

そのほか、文芸作品に地方語の用いられているものも見のがせない。一例をあげるなら、田中千禾夫氏の「肥前風土記」（文学座二十周年記念公演台本）〔新劇　十月号〕のようなのがある。

随想その他、どんなものも、利用のしかたしだいでは、みな、すぐれた方言研究資料となる。どのような断片資料も、そのことばの生息の環境が示されている時はとうとい。時に、執筆者・報告者が、無自覚に、あるいはまちがいをおかしなどして、ものを示していることがある。そのような場合、わたしどもは、かえってよく、そのものの生命とはたらきとを見とり得ることが少くない。偶然資料が貴重資料となる。

〔その二　史的研究〕

ゆるやかな意味で史的研究と言う。

方言史の研究として見るべきものはない。この方面のしごとは、そもそもむずかしいことである。

過去の時代の、ある方言についての研究も、ほとんどない。資料のないのによる、当然の結果とも言えよう。

1 仙台方言集「浜萩」について　小林好日　国語研究　第四号

「浜萩」は江戸時代の仙台方言書である。

2 伊勢本系古事記の声点　和田実　国学院雑誌　第五十七巻第七号

3 名義抄時代の京都方言に於ける二字四段活用動詞のアクセント　南不二男　国語学　第二十七輯

4 近アクセント総　下上型名詞甲・乙類の別発生の再検討――声明の旋律に反映したアクセントを資料として――　桜井茂治　国語研究　第五号

5 「仏遺教経」の旋律に反映した国語のアクセント　桜井茂治　国語学　第二十七輯

など、アクセント史に関する労作が少くないのは、方言アクセント研究との関連上、注目される。

なお、

6・雑兵物語に見られる用言をめぐって　金田弘　国語研究　第四号

がある。

〔その三　音韻関係〕

1　日本語音調の二面性　平山輝男　国学院雑誌　第五十七巻第七号

2　柴田君の「日本語のアクセント体系」を読んで　金田一春彦　国語学　第二十六輯

3　いわゆる「アクセントの変異現象」について　中村通夫　中央大学文学部紀要　文学科　第三号　〈未見〉

4　アクセント表記の零と無限大　川上蓁　国語・国文　第二十五巻第三号

は、語アクセントに関する一般論的なものである。

5　文頭のイントネーション　川上蓁　国語学　第二十五輯

をここにあわせかかげる。

語アクセントの研究を、地方別に見れば、

6　福島県館岩村方言の音調　大島一郎　人文学報　13

7　富山・岐阜両方言の音調境界線とその近隣方言の音調体系――京阪式（富山県の音調）と東京式（岐阜県の音調）との対立――　平山輝男　方言論文集〔1〕（近畿方言双書　第四冊）

8　桑名市新地・矢田磧に残る音韻とアクセント　杉浦茂夫　三重県方言　第2号

9　平古に残る桑名武家ことば――アクセント・語法について――　巌佐正三　三重県方言　第3号

10　岡山県に於けるアクセントの分布　広戸惇　島根大学論集　人文科学　第6号

11　高知県幡多郡のアクセント　土居重俊　音声学会会報　第90号

のようなのがある。

地方音についての研究物は少い。

12　広島弁における動詞の音便　河野亮　音声学会会報　第90号

13　広島弁の拗音　河野亮　音声学会会報　第91号

14　九州西南部方言における長母音について　上村孝二　語文研究　第四・五号

音韻関係は、方法論が尖鋭化してきたと言えようか。その点で清新な研究およびその気運と、旧来の常識的な研究との間に、断層が見られないでもない。

地方音についての総合的な研究など、もっともっとおこってよいと思う。地方音の、注目すべき相関の現実を、音声生活としてとらえることも、今後大いになされなければならない。

部分的に見ても、それこそ、今のうちに書きとめておいたらよいというような事象が、全国にはずいぶんあるように思われる。九州のいわゆる「ツ」音など、したがって「ヅ」音の存在など、九州全域にわたっての精査がほしいものである。このようなことを考えると、討究問題は多い。

〔その四　文法（表現法）〕

文法を、理念としては、表現法と考える。

1　方言における敬語　藤原与一　解釈と鑑賞　五月号

2　対話の文末の「よびかけことば」――「ナモシ」類その他について――　藤原与一　紀要　広島大学文学部第9号

3　しなさだめ　山本俊治　兵庫方言　4

右をとり分ければ、他は左のように排列することができる。

4　近代東京語質問表現における終止形式の考察　――その通時的展開について――　田中章夫　国語学　第二十五輯

5　感動詞に関する浜名郡新居方言　山口幸洋　土乃以路復刊第五号

6　尊敬の助動詞「れる・られる」の命令形　虫明吉次郎　方言論文集〔1〕（近畿方言双書　第四冊）

7　補助動詞について（承前）　佐藤茂　方言論文集〔1〕（近畿方言双書　第四冊）

8　三重県方言に於ける敬語の助動詞の系譜　矢野文博　三重県方言　第2号

9　旧阿波村に於ける反語的表現　――「イカシテ」の一考察――　中野喜代一　三重県方言　第3号

10　員弁郡田辺の反語的表現　水谷明夫　三重県方言　第3号

11　桑名地方語の動詞・助動詞について　市川二美江　三重県方言　第2号

12　桑名市新地・矢田磧に残る語法　堀田要治　三重県方言　第2号

13　平古に残る桑名武家ことば　――アクセント・語法について――　巌佐正三　三重県方言　第3号

14　名張地方の対人称代名詞について　富森盛一　三重県方言　第3号

15　ヤス（なさる）の由来　楳垣実　方言論文集〔1〕（近畿方言双書　第四冊）

16　神戸方言語法　鎌田良二　兵庫方言　4

17　神戸と比較した播州高砂市方言の語法抄　原朗　兵庫方言　3

18　赤穂方言の助動詞　島田勇雄

19　赤穂方言の動詞・形容詞　鎌田良二

20　赤穂方言の表現法　山田潤三

右三つ「播州赤穂方言の研究　語法編」所収　兵庫県方言学会

21　日本語表現法上の文末助詞「ノ（ノー）」――文末の卓立声調――　神鳥武彦　国文学攷　第十五号

22　今日の阿波ことば　金沢浩生　阿波方言　第三巻第一号

23　『雪が降っている』に対応する徳島方言その他について――語法調査報告抄――　宮城文雄　阿波方言　第三巻第一号

24　幡多方言における敬卑表現　浜田数義　高知県立中村

高等学校研究論集　第一号

25　敬語法をたずねて　岡野信子　北九州国文　第六号

26　加来敬一氏の「福岡県方言の語法」を読んで　都竹通年雄　北九州国文　第六号

こうして見ると、文法研究はさかんであると言えようか。おもしろい着眼、新しい意図、共同動作など、見るべきものがある。力作にも富んでいる。しかし、方言文法の正統的研究が広くもり上がるところまでは、いっていないように思う。

〔その五　語詞〕

「語彙」ということばの一般の用法は、つねには正確でない。ここでは、「語詞」という名目を用いて、以下のものをくくっておく。じじつ語彙の研究である場合も、それはもとより、ゆるやかな意味で、語詞の研究とも言える。

はじめに全国的なものをあげる。

1　彼岸花の方言　山口隆俊　言語生活　3月号

2　言葉の教室　葛と藤（その二）——カ行とハ行——　中平　解　民間伝承　二月号

3　同（その三）　三月号

4　同（四）トノサマヨモギ　四月号

5　同（五）モチシバとウシ　五月号

6　同（6）コガネグサ　六月号

7　同（7）ハハコグサとモチシバ（補遺と訂正）七月号

8　同（8）水すまし　（その一）八月号

9　同（9）水すまし　（その二）九月号

10　同（10）水すまし（その三）十月号

11　同（十一）水すまし拾遺　十一月号

12　同（十二）モチシバ拾遺　十二月号

中平氏の業績が多い。

つぎは地方別に見られるものである。

13　一里下り　渡辺行一　日本民俗学　第三巻第四号

14　むすめの方言　河原　宏　信濃　第八巻第一号〈未見〉

15　つくしの方言　同右　同　第八巻第四号〈未見〉

16　ねこやなぎの方言　同右　同　第八巻第五号〈未見〉

17　たんぽぽの方言　同右　同　第八巻第七号〈未見〉

18　いたどりの方言　同右　同　第八巻第九号〈未見〉

19　ひがんばなの方言　同右　同　第八巻第十一号〈未見〉

20　桑の実の方言　浅川清栄　信濃　第八巻第一号〈未見〉

21　ヤマボウシの方言　倉田　悟　植物趣味　第十七巻第三号〈未見〉

22　桑名武家ことばの語彙　倉田正邦　三重県方言　第2号

23　志摩郡志島附近の方言語彙　上村角兵衛　三重県方言　第3号

24　田辺方言語彙　村内英一　方言論文集〔1〕（近畿方言双書　第四冊）

25　野草の花束　——土佐方言百語——　桂井和雄　幡多方言　第2号

26　高知県における「かまきり」の方言分布　岡崎有郷　幡多方言　第2号

27 土地にちなむ俚語　橋詰延寿　幡多方言　第2号
28 幡多方言語彙考　(1)　浜田数義　幡多方言　創刊号
29 同（2）　同右　同　第2号
30 中村市大用における方言調査から　㈠　腰山賢司　幡多方言　創刊号
31 豊後南海部婚姻習俗　郷田洋文　日本民俗学　第四巻第一号
32 熊本県鹿本郡方言採集抄　坂口みのり　民間伝承　六月号
33 長崎県方言語彙の一考察　――その分布を中心として――　西島　宏　人文科学研究報告　長崎大学学芸学部第六号　〈未見〉
34 種子島方言採集抄　林田遼右　民間伝承　五月号
35 沖縄八重山郡川平部落調査報告　酒井卯作　日本民俗学　第三巻第四号

中にはごくかんたんな報告もある。また、「語彙」とあっても、文法事実の説明を主としたものもある。中にはまた、「語彙」とあって文例の豊富なもの、諸種の連語を示したものもある。いずれも、自由にこれらを利用するとすれば、好資料であることが少くない。

一般には、語彙観がもっと発達しなくてはならないと言えよう。その発達に応じて、語彙研究の諸項目は、要領よくとらえられるはずである。こうして、一方言についての組織的な語彙研究がおこなわれることが望まれる。

諸方言をつらね見ての語詞研究が、その題目のもとに、諸種の言語地理学的成果をあげるようになることは、また望ましい。

一口に言えば、言語の学としてすじのとおった、語彙・語詞の研究が、もっとおこなわなくてはならないと思う。そのさい、もとより、語彙は生活語彙である。どのような語詞の一つも、生活のことばでないものはない。こういう点で、しぜん、そこに、民俗学的方法などがはいることは、当然あってよいことであろう。人間言語の学のためには、方法は、自由に広汎に考えられてよいことである。

ともあれ、恣意的な語集や、得た程度の資料でする比較論のいきすぎなどは、これを洗練することにつとめたいものである。

〔その六　方言と国語教育〕

1 国語教育における方言と共通語との問題　此島正年　国語シリーズ　28　「標準語と方言」
2 方言史と国語教育　金沢直人　国語シリーズ　31　「標準語と方言」第2集
3 教室での方言・共通語の考えかた　坂井勝司　実践国語　四月号　〈未見〉
4 方言媒介論　（その一、二、三、四）　飛田　隆　実践国語　六、七、八、九月号　〈未見〉
5 アクセントとその指導　――石川方言について――　岩井隆盛　国語シリーズ　31　「標準語と方言」第2集
6 ダ行ザ行ラ行音の混同とその矯正法　藤本秀雄　兵庫方言　3
7 文法と関連した方言の指導と矯正　森吉芳記　「徳島

県における国語教育の問題点とその解明」の中　徳島県教育庁指導課

8　民間の敬語生活とその改善　―「ていねい」の意識について―　藤原与一　言語生活　1月号

この類のものでは、地方々々の教育家の、論稿や口頭発表が多かろう。

依然として混迷をつづけるのは、方言・共通語・標準語の概念規定である。このようなことが、早く明確になればよい。

口頭発表

1　「方言周圏論」適用の限界について　長尾勇　国語学会

2　オ段長音における二三の問題　中川芳雄　国語学会

3　東京及びその周辺のアクセントの変遷　秋永一枝　国語学会

4　津軽方言日常語彙小考　日野資純　国語学会

5　土佐ことば　―その概観と区画―　土居重俊　国語学会

6　奄美大島方言の一考察　九学会

7　アイヌ語・日本語及び琉球語に共通する特殊音　鬼春人　第11回日本人類学会日本民族学協会連合大会

〈わたしは、右のいずれも、聞き得ていない。〉

国語学会での方言関係の発表は、そんなにさかんであるとは言えない。そこに、方法上の行きづまりなどはないであろうか。

たえず新しい方法なり方向なりを求めて燃えていく方言研究、および方言研究界であればと思う。

放送

方言関係の放送は、まず活潑と言わなくてはならない。

毎週、N・H・Kの放送する国語講座「方言の旅」は、ここに重要な項目としてとりあげられる。これが、社会の多くの人々に方言への関心をおこさせている功は、大きいと言えよう。

国語知識開発のための方言放送一般について要望するならば、興味をさそうことに心をおくあまり、思わずに、方言事実をまげるようなことが、あってはならない。正確、正しい知識は、どこまでも尊重すべきである。二つ三つのことをおもしろく比較して示すにしても、その根底には、学理が通っていなくてはならない。分布を言いきることは、もっとも慎重を要する。想像と予断の類は、じゅうぶんにことわらねばならぬ。史的解釈も、つとめて用心ぶかくしないと、聞く人のあやまった速断をさそう。

放送はせっかくの好機である。このとき、方言の学問の高い文化性をねらって、学問の正しい布衍につとめなければならないと思う。

品位と品格は、このために重要な条件となる。

研究所・研究会

方言研究界において、国立国語研究所の存在と作業と役わりとは、いよいよ重要な意味を持ってきている。方言研究は、かつては、いわゆる民俗学によって開拓拡充されるところがあった。今は、研究所の、「地域言語社会」調査といったような考えかたや、その清新な科学的手法によって、方言研究は、新に発展せし

められつつある。

研究所はまた、全国的な言語地図を、七ヵ年計画で作ることを決定した。去年末には、地方調査員臨地調査の結果をまとめた分布図六枚もプリントされている。精密厳格な操作による調査が、美果をうむ日が待たれる。

例の九学会連合の共同調査は、三十一年も、前年につゞいて、奄美大島であった。

なお、東京都の、「三宅御蔵両島文化財綜合調査」もおこなわれた。平山輝男氏その他のかたの参加があったかと思う。

各地の研究会のことになると、わかりかねる。弘前には、大学中心の方言研究会がある。山形大学にも機関誌があるか。東京では、平山氏を指導者とする都立大学の研究会があり、寺川氏を指導者とする駒沢大学の研究会がある。北陸富山にも、研究会があるのかと思う。近畿方言学会〔近畿方言双書〕・三重県方言学会〔三重県方言〕・兵庫県方言学会〔兵庫方言〕のことは、上来引用したとおりである。和歌山にも「和歌山方言学会」があり、前年まで「和歌山方言」を刊行した。広島にも小研究会がある。四国では、土佐に、方言研究同好会「幡多方言」ができている。不用意で、福岡・熊本その他の、九州内の事情は、明らかにし得ていない。九州にかぎらず、諸方に、まだ、いろいろの研究会があろう。

さて、こうした研究会の、例会などの活動、あるいは共同調査のことなどが、雑誌「国語学」のような共同の広場に、まとめて掲載されるようになるとよい。方言研究会としては、相互の連けいがだいじである。——地域の個別に即しつつも、なお、全国的視野を持った方言研究活動にならなくてはならない。

展　望

以上の研究状況を大観するのに、方言研究界は、急角度上昇の進展ぶりとは、まだ言えないように思う。研究はしだいに広まり強まってはきていようけれども、昨今の状況は、まだ、大波の新しいうねりではなくて、前々と同程度の、中くらいな波かと思う。すでに、同じような波が、何度となく、くりかえされている。もはや、新しい大波、研究界の飛躍的発展が、おこってきてよい時である。——方言研究の本格的な発達が望まれる。

一　このためには、根本において、方言観がもっと進歩しなくてはならない。さて、このことは、国語学界全般にかかわる問題でもあると思う。

今日までのところ、いわゆる国語学界は、方言を、「音韻・文法・語彙・文字・方言」というような地位に置いてあつかってきた。研究部門の分類として、他に良法もないとしても、一般には、このようなこととあい応じて、方言研究部門は、単純に特殊領域視されすぎてはいないか。

大小の方言は、それぞれに、現代の口頭語の、体系的存在である。そういう、国語の現実態である。方言に即してものを見、ものを考えようとすれば、どのようにも広く、多く、国語研究を実施することができる。じっさい、方言研究は、国語研究の方法、異常ではなく通常の方法として、一定の意味を有しているのであ

る。特殊研究であるまえに、ごく一般の国語研究であり得ている。

一つの方言が、目前の言語体系であることは、時に、いわゆる言語学者によって、もっとも自然に言われているのではなかろうか。見識、と言うまでのことはないとしても、わたしどもは、しばしば、いわゆる言語学の方から、オーソドクスの方言観を聞く。卑近な言いかたをすれば、わたしどもは、おりおり、「国語学者」よりも「言語学者」の方が身に近いことを感じることがある。

わたしどもも、まったく、一個の言語学徒でありたい。方言研究は言語の学にならなくてはならないと思う。このような方向に対して、一般の国語学者が、じゅうぶんな認識と教正とを示して下さることは、もっとも願わしいことである。なお、いわゆる言語学からの指導も、わたしどもの方言観察の自然さ・すなおさを——その低い段階の作業も——はげまして下さるようであるならば、ますます幸である。

ともあれ、方言研究者自身としては、こだわりなしに、方言を、国語の一つの現実態——体系的存在——としてうけとる用意が、なくてはならないと思う。この態度は、いったい、どれほど普及しているであろう。一般には、「方言集」というような考えも、ようやく、洗練されてきたところかと思う。

方言観の一だんの前進のために思うことは、どうしても、方言を、渾然とした生活事態と見るようにならねばならないということである。方言を生活語の世界と見る考えかたの徹底は、方言研究の飛躍的進歩をもたらすだろう。

このような理念からすれば、ますます、方言は、まず文表現本位にとらえられねばならぬことになる。方言の一ことば一ことばを、生活の表現としてとらえるのである。方言の体系的記述は、文表現によることを基本としなくてはならないと思う。その後のこまかな分析は自由であり、じつは、この文表現の材料によってこそ、正確な分析資料も得ることができる。

方言と方言とを、要素によって比照する作業も、またその要素をとることも、こういう、文表現本位の採録作業を基盤とすることによって、正しく、真に動的におこない得るであろう。

単語本位の方言採録から文本位の方言採録へ、これが、方言研究を本格的に飛躍発展せしめるもとになる。ことをこう限ってみても、これが案外理解されていないようである。方言の特性を考えてみるとよい。方言は地域的存在として、その相対的特色を発揮している。その個別の方言性を方言性としてとりあげることが、方言研究にとって重要であることは自明である。分析はすべてとうといとしても、その分析の場所を正当に得るために、方言は方言として、その全一的個性のままにとりあげられなくてはならない。そのじっさいの方法の困難はかずかずであるが、それらを克服していく用意の基本として、少くとも文表現本位にことばをとりあげることは、不可欠である。文表現本位ということは、最小限の要求である。

欲を言えば、二文の連関もとりたい。会話のさまを、そのやりとりのままに写すこともしたい。要するに、現場に密着していきたいのである。それゆえ、一文例についても、その発言の環境と性質とを記述して、これを会話の一文として処理することが必要とされる。

近来、よく、社会実態の総合調査がおこなわれる。地域社会の実証的研究の統一組織の中にあって、方言研究がよくその社会の生活の究明に実をあげ得るがためには、方言事実のとりあげかたが、総合的でなくてはなるまい。方言研究は生活語の学問として進むところがなくてはなるまい。方言研究が、ひとり、諸学の連関から遊離しがちだとすれば、これは、方言研究が、機械的な言語研究になっているからではなかろうか。社会生活の解明のためには、方言の社会的な機能に着目して、方言記述はなされなくてはならないと思う。文表現本位に見るということは、このような要請への、第一次的な答ともなるものである。

また、方言文法のとりあつかいかたには、いろいろの立場があるようにも言われる。しかし、文表現を重視する立場に立つかぎり、いろいろの文法観も、ここに統合してうけとることができよう。

二

上述のような方言観に即応して、方言調査法が敍述されねばならない。このような論議は、現在、さかんであるとは言えない。要地調査方法も、諸種の厳格な比較法も、これからの重要な論題となるべきものであろう。

「文例の方言訳」というような調査法の段階から、早く出なくてはならない。

比較のための条件統一というような考えかたがきびしくなれば、諸種の方言文献の引用・利用のしかたも、限定のよい、厳密なものとなろう。

三

フィールド・ウワーク第一という方言研究精神が、普及徹底しなくてはならないと思う。

「こんなことがある！」と、方言に国語の事実を見ておどろくことが、なおたりないのではなかろうか。方言に、国語の基本的な事実、——新事実を見ることができる。方言の野は、まさに、国語の原生の沃野である。沃野に立って深くおどろくことが、方言研究にとって重要である。

〃わらじばき〃の方言研究を、純粋の方言研究とよぶことができよう。方言を利用・活用する国語学者のほかに、方言の追求をもっぱらしごととする方言研究者、純粋の方言探究者が出てこなくてはならない。野外に専心する研究者が、その必然の対象によって、今日の研究法の改善を自覚せしめられる時、方言研究の本格は、しだいに明りょうなものとなろう。

学説へのかんたんなよりかかりは禁物である。周圏説があるとしたら、わたしどもは、日本の方言状態に立って、自由にこれを検討しなければならないと思う。どのような学説も理論も、みずからの野において、じかに経験し、その説を、さらに堀り深めて、ついに自己のものとしなければ、ほんとうではない。そのさい、当の説が、どのように広い考えかたに展開せしめられようとも、またせまい考えかたにとどめられようとも、問題ではない。じっさいの野外研究から、切実な理論を創造することにおいて、わたしどもは、もっとも自由柔軟でなくてはならない。

要は、日本語諸方言の事実にもとずけばよいことである。

四

現行の区画説には、まだなにほどかの無理があると思う。区画は人々の大きな関心事であり、また、たとえ素描の区画論にもせよ、方言研究の前提としてこれが必要であることはもちろんであるが、一方から言えば、区画は、方言地理学的研究の終結で

もある。この意味で、今日の研究段階では、区画の本画的な決定は、なお多少とも無理と言わなければならない。事象の分布、全国的分布で、確言し得ることは、わりと少い。

地区別には、えらんだ事象によって、それらおのおのの分布を詳論することができても、全国的見地に立って、一定の、えらばれた事象の、相当数につき、そのおのおのの分布を詳論することは、まだできない。したがって、国語今日の全国的な方言構造について、いわば構造論的に、方言分画を論定することは不可能である。日本語の諸方言を通観したさい、どういう事項が、方言比較のための徴証として適当とされるか。その研究も未発達である。

理想的な区画論に対しては、現在の区画論は、徴証の整頓、広い視野での整頓という点で、方法が恣意的であるとも言うことができよう。

いったい、事象の分布も、やや安易に言われすぎている。単純な場合の説明にしても、しばしば不完全におこなわれている。分布の言表はいかにもむずかしい〃ここにはこれがある。〃と言うと、人は、他にはないのだと思いこみやすく、ある人はまた、すぐに、〃いや、ここにもある。〃と抗議する。この自然の反応によく注意して、事実の存在と調査のしかたとに忠実に、表現の適正をはからねばならない。分布の領域を指摘したり限定したりする場合も同様である。一般には、今日の研究段階だと、他地・他例、周辺・遠方を顧慮した言いかたをしなくてはならない場合が多かろう。

ここにも、たしかめの精神、健実なフィールド・ウワーク精神がいる。

あるいて現地で苦労すればするほど、事項のとりあげかたが慎重になり、分布の述べかたが用心ぶかくなろう。

五 もっと、精密な研究がさかんにならなくてはならないと思う。相当範囲におよんでの、概観的な説明が、いくらくりかえされても、研究の深化にはならない。ごくせまい範囲の、小方言についての、体系的な研究、一つの事項についての精細な研究（これは、できれば、いくつもの方言をつらね見たうえでの）が、さかんになるべきであろう。概観にしても、角度のするどい、いわばモノグラフィックな概観がさかんにならねばならない。要するに、今日は、意図の明確な実証研究のさかんになるべき時だと思う。

この進展とともに、区画論も進歩しよう。方言に関する生きた理論もうまれよう。したがってまた、方言（体系的存在）の統合的な（―観察諸部門をつらぬいての―分析的かつ総合的な―）把握記述も、成功してくるものと思う。

六 展望のむすびとして、わたしは、方言研究が、ことばを愛する学問に徹底すべきことを強調したい。趣旨は、すでに、事実の精細を要望し、フィールド・ウワークの精神を強調したところに明らかである。

抽象的に考えたのでは、どうにもならない。方言の事実、それは、人間のうんだ歴史的な事実であるが、その事実を追求しなければならない。追求して正確につかむのである。事実の正確な把握と正しい報告とは、学問の骨子でもあろう。もとよりわたしも、一人の忠実な報告者になりたいと思う。方言を見て、できるだけくわしく、国語の事実を報告しようと思う。（三二・七・六）

――広島大学助教授――